

34 第 45 回「日本生涯教育学会」大会に参加して！今回は、意外な収穫もあった?!

堂本 彰夫

(1) まずは、その前に、驚きの事実が！

別コーナー（新通信「岳陽と共に」第 41 号）でも触れたように、過日（11 月 30～12 月 1 日）、「日本生涯教育学会」第 45 回大会に、オンラインであったが、参加した！一時期（相当な期間）は、この学会大会（通常は 11 月末、原則、東京上野にある「国立教育政策研究所社会教育実践研究センターで実施）に直接出向くのが、私の、年間を通しての一番の楽しみであったが、いつのまにか、このような参加となってしまっている（5 月の、福岡県立社会教育総合センター行われる「中国・四国・九州地区生涯教育実践研究交流会」もそうである！しかし、こちらは、いまでは参加さえしていない！）！月日の流れを、つくづく感じさせるわけであるが（尤も、単なる物理的な時の流れでもないものもあるので、真に複雑な心境ではあるが？）、それはそれとして、ここでは、いくつか取り上げたいことがあるので、改めて、備忘録的に？書き記しておきたい（大会関係者や登壇または発表者には、標題のような言い方は、甚だ失礼だと思ながら？）！ただし、残念ながら、もう既にかかなりの日数が過ぎてしまっているの、その時の昂奮や感想は、かなり減衰してしまっている？思えば、まだ 3 週間前の話である！何とも情けない、元研究者？、否、単なる往生際の悪い高齢者ではある?!

まあ、そんなことはともかく、まずは、上記「別コーナー」では、「今回は、とても面白い発表を聞かせてもらった！なかでも、私が、35 年前前後に勤務していた国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（当時名：国立社会教育研修所／愛称「国社研」）の発表には、とても驚かされた！まさに、隔世の感、ここにありということであったが、その取り組みには、甚大な意義と可能性を感じさせてもらった！」と書いている！そして、その理由として、「と言うのも、そこでは、現在『BuRaLi（ぶらーり）e 上野』というものが行われており、これまでは、調査研究や関係者の研修だけで、その機能を果たしてきたセンターが、その枠を取り外して、近隣の人々や学校（高等学校）と協力して、新たな役割を構築しようとしているからである！折角の機会でもあったので、少し質問をさせてもらおうと思ったのであるが、時間がなくて、結局は出来なかった（非常に残念である！）」ともしている。余計なことだが、これは、オンライン参加の悲喜劇でもある？

さらには、「要は、その取り組みが、いわゆる『国策（総合教育政策）』として、どのように波及していくのか？ということであるが、単なる、センターの生き残り策で終わるのではなく、同センターの研究・研修事業に、どう生かされるのかということである！ちなみに、そこ（「地域学校協働活動」）での大きな課題は、かの『教育課程』にどう絡ませるのかということであるが、それが、うまくいかないと、学校側にとっては、負担の大きいものとなる（しかも、現在、その学校側は、かの「働き方改革」の真っ只中であって、そうしたヴィジョンを失おうともしている？）！だから、社会教育側が、どんなに熱意をもって協働、協力を呼び掛けても、迷惑な話となる?!そのことを克服するためにも、この動きは重要なのだ！」としている。

また、最後には、「ということで、今回の学会参加では、改めて、様々な情報提供や示唆を受けた！現役をゆうに退いた身ではあるが、この恩恵？を、是非とも、今付き合っている人達に伝えたい方はない（特に沖縄の人達に！主として『教育協働アカデミー』を通じて！）！そしてまた、その辺りのことを、広く『新・教育協働への道』で語っていくことにしたい（目腰脚を気にしながら？）！」と結んでいる。まさに、この結びを受けて、ここでの執筆を始めているわけであるが、現実には、真に厳しくて（否、寂しくて？）、まだまだ、そのようなことを喋り合う人や機会も、ほとんどない（過日のズーム交流「教育協働アカデミー」で、一方的に紹介したことはしたが！）。だが、これが、今の現実なのだから、仕方がない?!

(2) フォーラム／研究・事例発表について

ということで、取りようによっては、何とも複雑な心境の吐露で始めたが、とにかく、ここでは、その時の思いやいくつかのアイデアを、可能な限り思い出しながら、書き留めるだけということになる！そこで、最初が、「生涯学習政策研究フォーラム」ということになるが、テーマは、「社会の変革は生涯学習に何をもちたらずか～GX推進による価値の転換と生涯学習～」であった。登壇者は、西明夫氏（文部科学省総合教育政策局生涯学習推進課）、鴻上哲也氏（伊万里市図書館）、澤野由紀子氏（聖心女子大学）、そして、コーディネーターは、佐藤裕紀氏（新潟医療福祉大学）であった。大会プログラムに示された「概要」には、以下、

「現在、政策課題として、GX（グリーントランスフォーメーション）、DX（デジタルトランスフォーメーション）、持続可能性、生物多様性、社会的統合、平和構築などが世界規模で取り組まれています。これらの進展は、社会的に見れば未来に向けて社会全体（仕組み、関係性、価値）の変革を目指すものであり、人に視点を当てれば一人一人の価値観の変容と意識及び行動の変革を求めるものであります。

このフォーラムでは、世界的に多様な分野で展開が見られるGXに焦点を当て、GX推進が生涯学習とその推進にもたらす未来像を考えます。GXは、気候変動対策や脱炭素社会の構築を目指す国家的、かつグローバルな課題（チャレンジ）であり、多くの国でクリーンエネルギー政策や経済成長の戦略として位置付けられています。一方、これは人々に家庭、職場、社会のすべてにおいて環境に価値を置く意識と行動の変容を求めるものであり、これからの社会を担う人材育成を見据えた教育や学習に与える影響は計り知れないものがあります。本フォーラムでは、国内外におけるGX推進と生涯学習に関連する政策、実践、研究を俯瞰し、GX推進と価値の変換に果たす生涯学習の将来像を議論することにします。」

とある。もちろん、テーマ設定の趣旨や、その適宜性については、まったく異論はないし、その意義は大きいことは言うまでもない！ある意味、本学会においては、その理論的リーダーシップを、積極的に取っていかねばならない課題と言えるであろう！ただ、内心では、一方の？「教育の危機？」（学校教育、社会教育共に？）がある中で、このような課題に、関係者（とりわけ学校の教師？）がどのように対処できるのか？そして、そのことに対して、本学会（「生涯教育（学）」）がどのように貢献できるのか？そういうことである！

ちなみに、文科省の西明夫氏のタイトルは「いま求められるGXとは」で、例の「リスキリング」の重要性を、鴻上哲也氏は、「公共図書館におけるGX推進」ということで、自館の「カーボン・ニュートラル・ライブラリー構想」の経緯を、そして、澤野由紀子氏は、「欧州におけるGXと持続可能な発展のための生涯学習の取り組み」ということで、かのEUの取り組み等を紹介された。それぞれが、貴重な情報ではあったが、特に、澤野氏の、フォーマル、ノンフォーマル、インフォーマルという、教育の三層構造的視点からの課題把握の指摘には、まさに本学会ならではのものと、密かに拍手を送った次第である（もちろん、誰も気付いてはいないが！）。

(3) 改めて、今回の収穫について

ところで、改めて、今回の収穫について述べると、研究発表自体では、自らが選んで参加した部会（ブレイクアウトルーム）の発表が、やはり面白かった！私の古巣の「国社研」のみなさんの発表は、冒頭に書いているので、その他のものを挙げると（タイトルだけだが）、「長期自然体験活動が未来を拓く力を育む～福島復興支援事業なすかしドリームプロジェクト11年間の追跡調査からわかること～」 「学校運営協議会制度の導入による地域住民の意識の変容～地域による不登校支援に向けた“大人の学び”を生かしたサポーター制度の構築を通して～」 「社会教育主事の力量形成に関する質的検討－インタビュー調査を踏まえて－」 「教養・健康・夢を育む生涯学習の推進～16年目となる西郷単位制総合大学の実践から～」 「ウェルビーイングとデモクラシーを育む学習都市・学習コミュニティに関する比較研究・スウェーデンとフィンランドを中心に」（※前2者は、「生涯学習実践事例研究部会」での発表。そして、その内の前者が、予想通り、「会長賞」となった！）であった。

とにかく、多種多様なみなさんの思いと実践の積み重ねが、最近ではほとんど触れることのなかった私にとっては、何とも懐かしく（羨ましく？）、頑張っている人は、本当に頑張っているのだなあと、つくづく思ったわけであるが、今回は、特に、国社研で仕事をしていた人達（都道府県派遣教員）の研究（実践？）発表に、その先駆性？と、何故か嬉しさを感じた！私も同じであったが、そこでの経験は、その後のキャリアにとって大なる財産（力）となるということである！今後も、いろんな人が、そこで活躍されて欲しいと、改めて思った次第でもある（今からでも遅くないので、是非〇県の誰かが行ってくれたらなあ？）。来年もまた、同じ時期に、同じ場所で開催されるようであるが、果たしてそれに参加するのだろうか？一応は、既にリタイア組となっているので、参加するにしても、おそらくは、再びオンライン参加となるのであろう？！

ちなみに、終わってから、知己の、雑誌『社会教育』の編集長Kさん（彼も、オンライン参加であった）に電話をして、私達なりの総括を楽しんだが、私には、やはり永遠の？不満が残る？それは、「社会教育」と「生涯教育」の、さらには「生涯学習」との違いや関係が、あまり参加者（会員）には意識されておらず（個人的にはあるのかもしれないが？）、様々な分野・テーマの発表があるのはよいのであるが、何か本学会としての研究成果全体の独自性みたいなものが、今一つ希薄のように思えるということである！これについては、これまでも随分主張してきたつもりであるが、それは、やはり次の世代の人達の課題であり、個々の理論構築や研究成果が、その時々々の現場実践に大いに役立つものであれば、それはそれで十分なのかもしれない？！要は、それらが、現場の人達の力強いエールとなれば、それでよいのである！

とは言え、今は、「教育を救え！疲れ果てている教師を救え！一生懸命に頑張っている、名も無き社会教育関係者（地域の人々）にエールを送れ！」、それだけが、私の言いたいことである！ただし、それは、何度も何度も繰り返すように、これまでのような発想やしくみでは、なかなかうまくいかない！改めて言えば、家庭教育的なもの、社会教育的なもの、学校教育的なもの、これらが、大きなリンクをなす必要があるということである！「生涯教育」は、そのための理論であり、実践の手立てでもあるのである！（つづく）